

論 文

恋愛関係における排他性と親子接触経験

——女子青年の場合——

諸 井 克 英

同志社女子大学
生活科学部・人間生活学科
教授

橋 本 綾

同志社女子大学
生活科学部・人間生活学科
2009年度卒業生

中 井 香 織

同志社女子大学
生活科学部・人間生活学科
2009年度卒業生

Abstract

The present study examined the effects of past relationship experiences with parents on romantic relationship exclusivity. The Past Relationship Experiences with Parents Scale (developed by Moroi *et al.* (2010)) and the Exclusivity in the Romantic Relationship Scale (developed by the authors) were administered to female undergraduates ($N=262$). The factor analysis (the principal factor method with promax rotations) of the Exclusivity Scale yielded two factors, labeled as "displeasure with sexuality" and "displeasure with communication." The correlational analyses indicated that past control experiences with the father enhanced exclusivity feelings in the romantic relationships. Several problems with this research method were discussed.

Key words : exclusivity, romantic relationships, parents, adolescent.

I. 問題

恋愛関係の営みは、青年期の重要な発達課題であるにもかかわらず (Havighurst, 1953), かつては実証的研究の対象とはならなかった。しかしながら, Rubin (1973) が一般的魅力研究で曖昧にされていた「恋愛感情 (loving)」と「好意感情 (liking)」の実証的区別を提唱したことに代表されるように, '70年代になると恋愛現象は社会心理学の重要な研究主題の一つとなった。今では, わが国においても, 多くの研究知見が提出されている (松井, 1993; 齊藤, 2006 など参照)。

ところで, 恋愛関係を他の対人関係と区別する特徴として排他性をあげることができる。増

田 (1994, 1998) は, 社会構成主義の観点から, 排他性を「相手行動に対する“独占欲”と自分の行動に対する“貞操観”の両方に共通する, 恋愛関係の二者性を保持するための“縄張り”意識」と定義した。そのうえで, 恋愛カップルを対象に, 15個の行動を呈示し相手をとった場合 (相手の行動に対する排除性) と自分をとった場合 (自分の行動に対する排除性) の好ましくなさを恋愛カップルに評定させた。数量化Ⅲ類により排他性の単一次元性を確認した上で次の興味深い知見が示された。女性にとっては, 少なくとも自他のいずれかにとって唯一の恋愛集団であることを強化し続けることがその関係の存続可能性にとって重要となる。対照的に, 男性にとって存続可能性の高い集団は, その恋愛集団に対する自分の所属の仕方について自分の希望通りに相手と合意が成立している関係であった。つまり, 女性はプラグマティスト

Exclusivity in Romantic Relationships as a Function of Past Parental Relationship among Female Adolescents.

であり、男性はロマンティストといえる。

また、金政（2006）は、愛着理論の観点から排他性をとりあげた。23個の行動それぞれについて、排他感（相手が“自分以外の異性と当該行為をした場合の不快さ）と排他感表出性（そのような不快感を恋愛相手に対する何らかの行動によって表出する可能性）を測定した。因子分析によって、排他感および排他感表出性ともに、「性的・親密行動」と「コミュニケーション・共行動」の2側面が抽出された。その上で、恋愛関係における愛着スタイル（親密性回避、関係不安）との関連が検討された。

諸井（2004）は、愛着理論の立場から、親との過去の関係経験が特定の仕方で沈殿し、青年期初期に始まる「異性への関心」に対する碇泊点として機能すると考えた。大学や専門学校に通う男女学生を対象として、親との接触経験と恋愛観との関連を検討した。一般的には、男女ともに母親との愛着経験が恋愛観に強い相対的影響を見せ、父親の場合には、とくに女子で過去の親子関係経験が恋愛観に影響をもつことが認められた。

諸井（2004）によるこのような知見を踏まえ、本研究では、親との過去の接触経験が青年期に営まれる恋愛関係での排他性感情に影響をおよぼすと仮定した。親との接触経験は、小野寺（1993）が開発した尺度を改変した先行研究（諸井，2004，2006）によれば、「情動的絆」と「統制」の2側面から構成される。「情動的絆」とは子どもに対して様々な交流を図る親の行動であり、「統制」とは子どもに対する様々な統制・規制を表す親の行動である。

親との「情動的絆」接触経験が相互の信頼感を育むことを前提にすると、異性との関係維持にあたっては相互の行動の許容性を生じるはずである。このことを仮説Ⅰとした。

仮説Ⅰ：親との過去の「情動的絆」接触経験は、青年期に営まれる恋愛関係で生じる排他性感情を抑制する。

他方、親からの「統制」接触経験の蓄積は、青年期に営まれる恋愛関係を支配する規範、つ

まり第三者との関係の営みを制裁する規範の遵守を促進させられると思われる。これを仮説Ⅱとして表した。

仮説Ⅱ：親による過去の「統制」接触経験は、青年期に営まれる恋愛関係で生じる排他性感情を促進する。

Freud（1917）の「エディプス・コンプレックス」の概念によれば、幼少期の子どもには異性の親に性愛的な愛着を向けることによって無意識的な感情複合体が形成される。つまり、Freudに従えば、恋愛に関する意識や態度は、自分とは異なる性別の親との関係経験に影響を受けることになる。したがって、以下の仮説が考えられる。

恋愛関係は異性との社会的営みであるので、同性の親よりも（女子青年にとっては母親）、異性の親（女子青年にとっては父親）との間で培われた接触経験のほうが、排他性感情に強い影響をおよぼすはずである。このことを仮説Ⅲとして検証することにした。

仮説Ⅲ：仮説ⅠやⅡの傾向は、異性である親との接触経験のほうが強まる。

以上の3つの仮説を検討するために、女子大学生を対象として、恋愛関係における排他性と親子接触経験を測定する質問紙調査を実施した。

Ⅱ. 方法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して、『日常生活行動』調査の名目で質問紙調査を実施した（2009年6月8日・15日）。回答にあたっては封筒を用いて質問紙を受け渡しをすることによって匿名性を保証した。また、質問紙実施後に研究目的と意義を簡潔に説明した。

青年期の範囲を逸脱している者（25歳以上）を除き、各尺度に完全回答した女子学生262名を分析対象とした（2年生46名、3年生209名、4年生7名）。回答者の平均年齢は20.17歳（ $SD=0.665$, 19～22歳）であった。

質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本的属性に加え、①対父親・対母親接触経験尺度、②愛着スタイル尺度、③「最も親しい異性」に関する質問群、および④恋愛関係排他性尺度から構成されている。本報告では、②に関する分析は省略する。

1. 対父親・対母親接触経験尺度

諸井・小切間・荒木(2010)と同じ尺度を用いて、回答者が小学生時代に父親と母親それぞれとどのように接触したと認知しているかを測定した。

対父親接触経験尺度では、回答者に「小学5・6年生の頃」の父親との関係の様子を思い出させ、22項目それぞれがあてはまる程度を4点尺度で回答させた(「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。母親についても、同様な仕方で評定させた。

回答者の半数は対父親接触経験尺度を先に($N=125$)、残りの者は対母親接触経験尺度を先に回答させた($N=137$)。

2. 「最も親しい異性」に関する質問群

回答者に異性の友だちのうちで「恋人」や「最も親しくしている異性」を一人思い浮かべてもらい、その人のイニシャルを記入させた(いない場合には×印を記入し、以下の質問には回答する必要がないと指示)。また、その人との関係水準認知(「1. 恋人」, 「2. 恋人とはいえないが、かなり親しくしている異性」, 「3. 恋人とはいえないが、少しだけ親しくしている異性」)を尋ねた。最後に、その人と「異性としてのつきあい」を始めた時期を月単位で回答させた。

3. 恋愛関係排他性尺度

回答者がイニシャルを記入した人物との関係の中で抱く排他性感情を測定した。

このために、諸井(2003)が松井(1990)の研究に基づいて作成した恋愛行動経験尺度項目を利用した。諸井は短大・大学に通う男女学生を対象に実施し、数量化Ⅲ類によってこの尺度が関係の親密化を表す1次元性をもつことを示した。

これらの項目のうち状況的に不適切な11項

目を除く(「別れたいと思ったことがある。」)27個の行動項目について、排他性感情を測定できるように文章を改変した(Table 2-a 参照)。イニシャルで特定化した異性(この場合には男性)が回答者以外の異性(女性)にそれぞれの行動をとった場合、どのくらい不快であるかを4点尺度で回答させた(「4. かなり不快である」, 「3. どちらかといえば不快である」, 「2. どちらかといえば不快でない」, 「1. まったく不快でない」)。

なお、以上の3尺度では、評定順の効果を相殺するために、評定用紙をそれぞれ頁単位(対父親接触経験尺度および対母親接触経験尺度2頁、恋愛関係排他性尺度3頁)でランダムに並び替えた。

Ⅲ. 結果

尺度の検討

3尺度の全項目について、項目平均値の偏り($1.5 < m < 3.5$)と標準偏差値($SD > .60$)のチェックを行い、不適切な項目を除去した。その上で、因子分析(主因子法、プロマックス回転 $<k=3>$)を行った。対父親・対母親接触経験尺度については先行研究に従って2因子解を求め、恋愛関係排他性尺度では因子固有値 ≥ 1.000 を満たす解を検討した。

因子分析では、①特定因子の負荷量が十分に大きく($\geq |.400|$)、②他因子への負荷が小さい($< |.400|$)という基準に一致しない項目を除き再度分析を行い、明確な負荷量パターンが得られるまで、このことを繰り返した。各因子への負荷量大きい($\geq |.400|$)項目から下位尺度を構成し、信頼性分析を行った。下位尺度項目の合計得点を項目数で割った値をそれぞれの下位尺度得点とした。

1. 対父親・対母親接触経験尺度

(1) 対父親接触経験尺度

項目水準の検討では3項目が不適切であった(≈ 1.5 : fa_a_3 / < 1.5 : fa_a_10, fa_b_8 / 項目番号は諸井ら(2010)参照)。残りの19項目を

Table 1-a 対父親接触経験尺度に関する因子分析（主因子法，プロマックス回転 $k=3$）と下位尺度の検討結果

	回転後の因子負荷量		
	I	II	相関分析(a)
〔情動的絆〕			
fa_a_4 父親は、よく私の相手をしてくれた。	.765	-.087	.691
fa_b_7 父親は、一緒にテレビを見ながら番組について私に話をしてくれた。	.747	.003	.665
fa_b_1 父親は、世の中で起こっていることについて私に話をしてくれた。	.674	.103	.617
fa_a_6 父親は、自分の子どもの頃や学生時代の思い出について私に話をしてくれた。	.626	.060	.583
fa_a_1 父親は、自分の仕事や職場の出来事について私に話をしてくれた。	.610	.079	.570
fa_a_7 父親は、家族旅行などでいろいろな所に私を連れて行ってくれた。	.597	-.024	.546
fa_b_5 父親と私は、2人で外出することがあった。	.584	-.106	.507
fa_a_2 父親は、運動会や発表会などの特別な行事には来てくれた。	.497	-.017	.457
			$\alpha = .844$
〔統制〕			
fa_b_4 父親は、私のしつけに厳しく厳格な教育方針をもっていた。	-.014	.775	.690
fa_a_5 父親は、私に口答えを許さなかった。	-.181	.738	.615
fa_b_6 父親は、叱ったり批判することが私のためになると思っていた。	.002	.718	.647
fa_b_10 父親は、私が悪いことをした時、かっとして怒った。	-.060	.641	.555
fa_a_9 父親は、私の帰宅時刻にうるさかった。	.285	.606	.590
fa_a_11 私のことについては、父親が最後には決めていた。	.020	.512	.482
fa_b_3 父親は、私の身なりについていろいろ注文をつけてきた。	.078	.466	.445
			$\alpha = .828$
〔因子相関〕	I	.198	

N=262

初期固有値 ≥ 3.026 初期説明率 49.95%

(a) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関

対象として2因子解を求めた。最終的な分析結果を Table 1-a に示す。第I因子は「情動的絆」、第II因子は「統制」と命名した。

(2) 対母親接触経験尺度

予備分析で不適切と判断された4項目を除き (>3.5: mo_a_2 / \approx 3.5: mo_a_4, mo_b_5 / <1.5: mo_b_8), 18項目を対象として分析を行った。最終解を Table 1-b に示す。第I因子は「統制」、第II因子は「情動的絆」であった。

(3) 下位尺度得点の検討

以上の分析に基づき、父親と母親それぞれで「情動的絆」と「統制」の下位尺度を構成した。尺度信頼性分析（相関分析、 α 係数）は適切な結果を示したので、それぞれの平均値を下位尺度得点とした（Table 1-a, 1-b）。

これらの得点に関する反復測定分散分析（対象<父親・母親>×接触経験<情動的絆・統制>）を行った（Table 1-c）。2つの主効果と交互作用効果がいずれも有意であったが、下位検定を

行くと、父親による「統制」が他よりも低い傾向があることが示された。この傾向は、前研究（諸井ら, 2010）でも見られた。

2. 恋愛関係排他性尺度

予備検討での不適切な項目はなかったので、27項目を対象として因子分析を行った。2～17因子解が可能であった。抽出因子が最も解釈可能であった2因子解を採用した。最終的な解を Table 2-a に示す。

第I因子は、他の異性との親密な行為を表す項目の負荷が高く、「性愛排他性」と名づけた。第II因子に負荷が高い項目は、他の異性との間で営まれる表層的なコミュニケーションを示す項目から成り、この因子を「コミュニケーション排他性」とした。

以上の分析に基づき、2つの下位尺度を構成し、尺度信頼性も確認した（Table 2-a）。2つの下位尺度得点を比較すると（Table 2-b）、「性愛排他性」が「コミュニケーション排他性」よ

Table 1-b 対母親接触経験尺度に関する因子分析（主因子法、プロマックス回転 <math>k=3</math>）と下位尺度の検討

	回転後の因子負荷量		
	I	II	相関分析(a)
〔統制〕			
mo_b_4 母親は、私のしつけに厳しく厳格な教育方針をもっていた。	.729	-.054	.645
mo_a_5 母親は、私に口答えを許さなかった。	.685	-.129	.600
mo_a_9 母親は、私の帰宅時刻にうるさかった。	.626	-.083	.531
mo_b_6 母親は、叱ったり批判することが私のためになると思っていた。	.604	.036	.542
mo_a_8 母親は、私がどこで何をしているかをいつも気にかけていた。	.531	.180	.490
mo_b_3 母親は、私の身なりについていろいろ注文をつけてきた。	.518	.109	.462
mo_a_11 私のことについては、母親が最後には決めていた。	.499	-.114	.415
mo_b_10 母親は、私が悪いことをした時、かっとして怒った。	.493	.074	.451
			$\alpha = .804$
〔情動的絆〕			
mo_a_6 母親は、自分の子どもの頃や学生時代の思い出について私に話をしてくれた。	-.049	.734	.614
mo_a_1 母親は、自分の仕事や職場の出来事について私に話をしてくれた。	-.177	.616	.484
mo_b_7 母親は、一緒にテレビを見ながら番組について私に話をしてくれた。	-.158	.565	.456
mo_a_3 私の異性の友だち関係について母親の方から尋ねてきた。	.148	.562	.517
mo_a_10 母親は、自分の好みの異性タイプについて私に話をしてくれた。	.027	.543	.481
mo_b_1 母親は、世の中で起こっていることについて私に話をしてくれた。	.157	.502	.487
mo_b_9 母親は、私の将来について気にかけていた。	.394	.425	.430
mo_b_2 母親は、私の頭を撫でたり、私の肩をたたいたりしてくれた。	.031	.405	.366
			$\alpha = .775$
〔因子相関〕	I	.220	

N=262

初期固有値 ≥ 2.690 初期説明率 43.08%

(a) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関

Table 1-c 父親 / 母親との接触経験に関する平均値の比較
—反復測定分散分析—

		平均値	標準偏差
父親	情動的絆	2.63	0.70
	統制	2.19	0.70
母親	情動的絆	2.69	0.60
	統制	2.71	0.60
〔反復測定分散分析〕		$df=1/261$	
主効果	対象	$F=65.68$	$p=.001$
	接触経験	$F=26.54$	$p=.001$
交互作用効果	対象 × 接触経験	$F=55.97$	$p=.001$
〔下位検定〕			
父親	情動的絆 vs 統制	$F=64.14$	$p=.001$
母親	情動的絆 vs 統制	$F=.32$	<i>ns.</i>
情動的絆	父親 vs 母親	$F=1.44$	<i>ns.</i>
統制	父親 vs 母親	$F=113.59$	$p=.001$

N=262

Table 2-a 恋愛関係排他性尺度に関する因子分析（主因子法，プロマックス回転 $k=3$）と下位尺度の検討

	回転後の因子負荷量		
	I	II 相関分析(a)	
〔性愛排他性〕			
exc_b_6「その人」が、「別の女性」のことを、恋人として友人やまわりの人に紹介する（または、紹介される）。	.990	-.064	.923
exc_c_4「その人」が、「別の女性」と性交する。	.989	-.102	.893
exc_b_4「その人」が、「別の女性」とキスしたり、抱き合ったりする。	.976	-.023	.941
exc_b_1「その人」が、「別の女性」と結婚しようと約束する。	.960	-.049	.906
exc_c_1「その人」が、結婚してほしいと「別の女性」に求める（または、求められる）。	.931	-.028	.893
exc_c_9「その人」が、「別の女性」と手を握ったり腕を組んだりする。	.856	.101	.919
exc_b_2「その人」が、「別の女性」と二人でデートする。	.776	.196	.913
exc_a_8「その人」が、「別の女性」にベッティングをする。	.728	.160	.836
exc_a_3「その人」が、「その人」の親に「別の女性」を紹介する（または、紹介される）。	.726	.191	.864
exc_c_8「その人」が、人に見せたくない面を「別の女性」に見せる。	.702	.242	.873
exc_a_2「その人」が、特別な用がないのに「別の女性」に会いに行く。	.699	.252	.877
exc_c_7「その人」と「別の女性」が、お互いの家へ遊びに行く。	.690	.295	.899
exc_c_5「その人」が、「別の女性」にさびしい時、話を聞いてもらう。	.621	.316	.843
exc_b_5「その人」が、「別の女性」のことをガールフレンドとして友人やまわりの人に紹介する（紹介される）。	.618	.238	.791
exc_b_8「その人」が、「別の女性」と二人だけでハイキングに行く。	.612	.357	.873
exc_a_4「その人」が、「別の女性」と結婚の話をする。	.527	.287	.734
			$\alpha = .982$
〔コミュニケーション排他性〕			
exc_b_7「その人」が、「別の女性」とお互いの家族の話をする。	-.002	.842	.920
exc_b_3「その人」が、「別の女性」と子どもの頃の話をする。	-.040	.839	.922
exc_a_6「その人」が、「別の女性」の相談事を聞いてあげる（または聞いてもらう）。	.127	.747	.918
exc_a_9「その人」が、「別の女性」と口げんかをする。	-.055	.663	.935
exc_a_5「その人」が、「別の女性」の肩をたたいたり、ちょっと体にふれる。	.226	.652	.920
exc_c_2「その人」が、「別の女性」の仕事や勉強を手伝う（または、手伝ってもらう）。	.223	.635	.920
exc_c_6「その人」が、「別の女性」の買物につきあう。	.376	.574	.918
exc_a_1「その人」が、個人的な悩みを「別の女性」にうちあける（または、うちあけられる）。	.392	.497	.923
			$\alpha = .931$
〔因子相関〕	I	.678	
〔残余項目〕			
exc_a_7「その人」が、「別の女性」にプレゼントを贈るか、贈られる。			
exc_b_9「その人」が、特別な用がないのに「別の女性」に電話をする。			
exc_c_3「その人」が、「別の女性」を殴る（または殴られる）。			

N=194

初期固有値 ≥ 1.664 初期説明率 76.83%

(a) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関

Table 2-b 排他性に関する平均値の比較—反復測定分散分析—

	平均値	標準偏差
性愛排他性	3.08	0.98
コミュニケーション排他性	2.30	0.84
〔反復測定分散分析〕		
主効果	$df=1/193$ $F=371.50$	$p=.001$

N=194

Table 3-a 交際月数に関する関係水準別平均値—一元分散分析—

	N	平均値 (x)	標準偏差
恋人	98	18.51 a	17.35
かなり親しくしている異性	52	40.00 b	51.17
少しだけ親しくしている異性	20	35.15 ab	35.35
[一元分散分析]	df=2/167	F=7.69	p=.001

(x) 異なる英字は互いに有意に異なることを示す ($p<.05$; Bonferroni の方法)

Table 3-b 排他性に関する関係水準別平均値—一元分散分析—

	N	[性愛排他性]		[コミュニケーション排他性]			
		平均値 (x)	標準偏差	平均値 (x)	標準偏差		
恋人	99	3.62a	0.46	2.63a	0.74		
かなり親しくしている異性	53	2.63b	1.03	1.96b	0.75		
少しだけ親しくしている異性	28	2.40b	1.06	1.96b	0.81		
[一元分散分析]	df=2/177	F=43.53	p=.001	F=17.67	p=.001		
[共分散分析]	共変量効果	父親_統制	df=1/165	F=5.97	p=.016	F=4.56	p=.034
		交際月数	df=1/165	F=3.06	p=.082	F=.53	ns.
		主効果	関係水準	df=2/165	F=32.59	p=.001	F=13.78

(x) 異なる英字は互いに有意に異なることを示す ($p<.05$; Bonferroni の方法)

Table 3-c 父親_統制に関する関係水準別平均値—一元分散分析—

	N	平均値 (x)	標準偏差
恋人	99	2.35 a	0.67
かなり親しくしている異性	53	2.10 ab	0.75
少しだけ親しくしている異性	28	1.93 b	0.51
[一元分散分析]	df=2/177	F=5.10	p=.007

(x) 異なる英字は互いに有意に異なることを示す ($p<.05$; Bonferroni の方法)

りも有意に高かった。

同定した異性との関係水準

本研究では、回答者に「最も親しくしている異性」を一人だけ同定させ、その人物との関係水準を尋ねた。半数以上の者が「恋人」をあげた ($\chi^2_{(2)}=43.23$; $p=.001$; 「恋人」($N=99$), 「かなり親しくしている異性」($N=53$), 「少しだけ親しくしている異性」($N=28$))。

交際月数と関係水準との関係を検討すると (Table 3-a), 「恋人」と「かなり親しくしている異性」との間に明確な有意差があった。排他性についても関係水準の分析を行った (Table 3-b)。「恋人」に対する排他性感情は、他の2群よりも有意に高かった。

父親や母親との接触経験については父親による「統制」のみ有意な効果が得られ (Table

3-c), 親密な定義をしている者 (「恋人」) が、父親からの「統制」接触経験が高かった。そこで、排他性感情について、父親による「統制」を共変量とする共分散分析を試みたが (Table 3-b), やはり「恋人」での排他性感情が高かった。

対父親・対母親接触経験と恋愛関係排他性との関係

対父親・対母親接触経験と恋愛関係排他性との関係を見るために、ピアソン相関値を求めた (Table 4-a)。父親による「統制」のみが「性愛排他性」や「コミュニケーション排他性」と有意な正の相関を示した。

次に関係カテゴリー別に同様の分析を行った (Table 4-b)。「恋人」の場合には、父親による「情動的絆」が「コミュニケーション排他性」を低めることを示す有意な負の相関が得られた。「か

Table 4-a 対父親・母親接触経験と恋愛関係における排他性との関係
—ピアソン相関値—

	性愛排他性	コミュニケーション排他性
父親_情動的絆	-.010	-.087
父親_統制	.199	.173
	<i>p</i> =.005	<i>p</i> =.016
母親_情動的絆	.012	.079
母親_統制	.027	.088

N=194

Table 4-b 対父親・母親接触経験と恋愛関係における排他性との関係—ピアソン相関値—

		性愛排他性	コミュニケーション排他性	
父親_情動的絆	恋人	-.102	-.214	<i>p</i> =.033
	かなり親しくしている異性	.055	.037	
	少しだけ親しくしている異性	-.002	.088	
父親_統制	恋人	.090	.024	<i>p</i> =.011
	かなり親しくしている異性	.276	.346	
	少しだけ親しくしている異性	.186	.097	
母親_情動的絆	恋人	-.078	.028	
	かなり親しくしている異性	.113	.202	
	少しだけ親しくしている異性	.132	.184	
母親_統制	恋人	.028	.068	<i>p</i> =.016
	かなり親しくしている異性	.105	.329	
	少しだけ親しくしている異性	-.178	-.233	

恋人 (N=99) ; かなり親しくしている異性 (N=53) ; 少しだけ親しくしている異性 (N=28)

なり親しくしている異性」では、父親による「統制」が「性愛排他性」や「コミュニケーション排他性」を高めることを意味する有意な正の相関とともに、母親による「統制」も「コミュニケーション排他性」を促進することを示す有意な正の相関が現れた。「少しだけ親しくしている異性」については有意な相関値は見られなかった。

IV. 考察

本研究の主目的は、恋愛関係における排他性と親子接触経験との関係の実証的検討であった。

恋愛関係における排他性は、親しい関係にある交際相手が別の異性に特定の行動をとったときに回答者が抱く不快感によって測定された。これは、金政（2006）による排他感の測定と同

じである。本研究では、因子分析によって、「性愛排他性」と「コミュニケーション排他性」の2因子が抽出された。つまり、恋愛関係における排他性は、恋愛関係の中で親密さを表す中核的な行動群層と、同性関係にも共通に生じ得る表面的な行動群層の2次元から構成される。これは、金政（2006）が得た「性的・親密行動」と「コミュニケーション・共行動」の2側面と同様である。

「コミュニケーション排他性」よりも「性愛排他性」に関わる行動を相手が犯したときには、当然のことながら、不快感が増大していた（Table 2-b）。さらに、自らの関係を「恋人」と定義している者にとっては、「性愛排他性」や「コミュニケーション排他性」のいずれもその違反に対して強い不快感を抱いていた（Table

3-b)。これらの知見は、本研究で抽出された排他性2側面の妥当性を示しているといえよう。

本研究では、過去の親子接触経験と排他性に関する3つの仮説を立てた。回答者全体の結果を見ると (Table 4-a), 父親からの過去の「統制」接触経験のみが2つの排他性感情との間に有意な正の相関を示した。つまり、「情動的絆」接触経験に関する仮説Ⅰは棄却され、「統制」接触経験に関する仮説Ⅱについては父親の場合にのみ支持された。したがって、「統制」接触経験については仮説Ⅲも支持されたことになる。

関係水準別の分析では (Table 4-b), 「恋人」と定義された関係では、父親との「情動的絆」接触経験と「コミュニケーション排他性」との間に有意な負の相関が現れたのみであった。これは、仮説Ⅰを部分的に支持する。

また、「かなり親しくしている異性」と定義された関係では、全体分析と同様に父親による「統制」接触経験と排他性2側面との間に有意な正の相関が示され、母親からの「統制」接触経験でも「コミュニケーション排他性」と有意な正の相関が見られた。これらの結果は、いったん「恋人」と定義してしまうと、父親からの「統制」接触経験は影響を消失するものの、父親との間で生じる心の通い合い経験は、恋人が行うかもしれない他の女性との表層的な行動に対しては寛容となる。しかし、異性関係としては曖昧である「かなり親しくしている異性」の場合には、父親からの「統制」接触経験が相手の行動に対して敏感にするばかりでなく、母親からの「統制」接触経験も同性にもとり得る表層的な行動水準に抑制的効果をもつ。

本研究では、回答者が交際相手の行動に対して抱く不快感の程度を排他性感情として取り扱った。しかし、この限りでは、恋愛関係の中で生じる特徴的感情である嫉妬との弁別の問題が生じる。嫉妬とは、Pines (1992) によれば、「大切な関係、あるいは、その本質をおびやかすものに気づいたときの反応」である。嫉妬を系統的に概説した中里 (1991) は、パートナーとの重要な関係が、ライバルのせいで、喪失の脅威

に曝されたとき、経験される感情である」と定義した。つまり、本研究での排他性感情は、恋愛関係にある一方に生じる感情に限定されていることから、嫉妬との弁別性が曖昧である。この点については、金政 (2006) による測定も同様な問題を抱えている。

増田 (1994) は、排他性を恋愛関係という二者集団の「バウンダリー」の問題として「自分たちの恋愛関係の存在理由となる特別な儀礼的行為」に関する合意形成を重視した。したがって、本研究のように、回答者が抱く排他性感情とともに恋愛相手が抱くと推測している排他性感情も測定する必要があるだろう。

ところで、回答者が定義する二者の関係水準と交際月数との関係を見ると (Table 3-a), 「恋人」水準で最も交際期間が短かった。「恋人」と定義できる感情が知り合ってから1年半くらいで生じることになる。しかし、「親しくしている異性」にとどまっている場合は、「恋愛感情」が生じないまま「好意感情」によって関係が維持されていることになる (Rubin, 1973)。つまり、当然のことであるが、一定期間内に「恋愛感情」が生起しなければ、「恋愛」関係に進展できない。ところで、Hatfield & Walster (1978) は、「恋愛感情」をさらに「情熱的恋愛 (passionate love)」と「友情的恋愛 (companionate love)」という2成分に区別した。「情熱的恋愛」とは「ひどく激しい感情的状態」で「思いやりの感情と性的衝動、有頂天と悲嘆、心配に安堵、利他心と嫉妬心」などの「感情の錯乱状態」と特徴づけられる。他方、「友情的恋愛」は、「安定した感情」、「友好的な親愛の情」、「誰かに対する深い愛着」である。Hatfield & Walster は、「情熱的恋愛」成分の壊れやすさつまり時間的限定性も指摘した。このことは、本研究での「恋人」水準の場合の交際期間の短さに対応しているといえよう。

過去の親子接触経験が排他性感情におよぼす影響に関して本研究では、とりわけ父親による「統制」接触経験に関する興味深い知見が得られた。Mitscherlich (1963) による父親像の衰退・

崩壊という考えに一致して、父親からの「統制」接触経験は、他の接触経験よりも有意に低かったが、青年期に営まれる恋愛関係での排他性に影響力を保持していた。今後は、先述した嫉妬の弁別性の問題を解決しながら、二者関係の定義の問題も含め、恋愛関係という二者集団を支える特有な心理学的メカニズムを実証的に明らかにしていく必要があるだろう。さらに、本研究では、回答者を女子青年に限定したが、男子青年を対象とした場合に、「異性への関心」に対する碇泊点として母親との接触経験が重要となるかも検討する必要がある。

< 付記 >

(1) 本研究は、橋本綾・中井香織（同志社女子大学・生活科学部人間生活学科 2009 年度卒業）が第 1 著者の下で卒業研究のために収集したデータに基づいている。

(3) データの統計的解析にあたって、*PASW Statistics 18.0 for Windows* を利用した。

(4) E-Mail: kmoroi@dw.doshisha.ac.jp

V. 引用文献

- Freud, S. 1917 *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. 懸田克躬（訳）『精神分析学入門Ⅱ』2001 中公クラシックス
- Hatfield, E., & Walster, W. 1978 *A new look at love*. University Press of America. 齊籐 勇（訳）『恋愛心理学』1999 川島書店
- Havighurst, R.J. 1953 *Human development and education*. New York: Longmans, Green & Co., Inc. 荘司雅子（監訳）『人間の発達課題と教育』玉川大学出版部
- 金政祐司 2006 恋愛関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について 社会心理学研究 22(2), 139-154.
- 増田匡裕 1994 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究 34(2), 164-182.
- 増田匡裕 1998 排他性 松井豊（編）『現代のエスプリ 368 恋愛の心理—データは恋愛をどこまで解明したか—』至文堂 141-150.
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論 33, 355-370.
- 松井 豊 1993 『恋ごろの科学』サイエンス社
- Mitscherlich, A. 1963 *Auf dem Weg zur vaterlosen Gesellschaft. Ideen zur Sozialpsychologie*. R.Piper & Co. Verlag. 小見山実（訳）『父親なき社会—社会心理学的思考—』1972 新泉社
- 諸井克英 2003 若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究（5）—恋愛の進展におよぼすセルフ・モニタリング傾向の影響— 同志社女子大学学術研究年報 54, 1-20.
- 諸井克英 2004 若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究（6）—親との関係経験が恋愛観におよぼす影響— 同志社女子大学学術研究年報 55, 129-143.
- 諸井克英 2006 女子青年における父親の魅力—父親との接触経験の影響— 同志社女子大学総合文化研究所紀要, 23, 71-80.
- 諸井克英・小切間美保・荒木友恵 2010 女子青年における食育経験の基本的構造（Ⅱ）—過去の親子接触経験と瘦身願望との関係を中心に— 同志社女子大学総合文化研究所紀要 27, 125-136.
- 中里浩明 1991 嫉妬と羨望: W.G.Parrott の類型学をめぐって—嫉妬と羨望の心理学（1）—神戸女学院大学論集 38(2), 49-66.
- 小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, 64, 147-152.
- Pines, A.M. 1992 *Romantic jealousy*. Sobel Weber Associates Inc. 鈴木晶・川勝彰子（訳）『ロマンチック・ジェラシー—嫉妬について私たちの知らないこと—』1995 筑摩書房
- Rubin, Z. 1973 *Liking and loving: An invitation to social psychology*. Holt, Rinehart and Winston, Inc. 市川孝一・樋野芳雄（訳）『好きになること 愛すること』1981 思索社
- 齊籐 勇（編）2006 『イラストレート 恋愛心理学—出会いから親密な関係へ—』誠信書房